

ゆらぎ

森野 水琴

彼はオーストラリアのエアーズロック付近のパワースポットに居た。ガイドの説明を受けて、岩の上に立つと足元に氣を感じた。仰向けに寝そべると冷たい岩肌から何かしら熱い氣を感じる。

立ち上がると木が風に揺れているのが見える。風の音は聞こえないが、木の揺れから風を見ている気分になる。

ゆらぎと彼との出会いである。

帰国してからも彼は心地よいゆらぎと出会った。一枚の木の葉のそよぎ、名もない小川のせせらぎ。観光旅行で録画しては楽しんでいる。

最近彼は書道を習い始めた。漢字よりも平仮名が難しい。

ひらがなの やわらかさ が書けない。

書道の先生の ひらがなのゆらぎ という言葉に驚いた。

ここにも ゆらぎが。

ゆらぎを意識して ひらがなを書いてみると書きやすくなった。

一月に彼はテレビで歌会始めを見ていた。番組の終わりに来年のお題が発表された。応募作は毛筆で自書し、郵送で九月三十日消印有効である。

歌は直ぐ詠めたが、毛筆は不得意で敬遠していた。さっそく書道教室を探し、体験レッスンを受けた。先生が「永」の字をお手本に書いてくださった。あまりの美しさに感嘆した。まさに美文字。二月から二時間レッスンを月三、四回習い始めた。

レッスン初日、応募要項に従ってパソコンで作成した原稿を持参すると、お手本を書いてくださり、前半は細筆で応募作の練習。後半は太筆の練習を続けた。

練習の甲斐があつて、九月中旬に彼は応募作を提出した。

歌会始めの入選者は十名。一万人以上の応募者から選ばれるのだから狭き門である。

とはいえ応募を好機として、書道を習い始めたことに彼は満足し、これからも習い続けようとしている。

彼はレッスン前半に細筆で平仮名を習っていた。楷書で「いろはに……ゑひもせすん」を書いた。

翌月からは平仮名の異体字も加わり、和歌を書き写している。漢字をくずして平仮名にしたというよりは、漢字がゆらいで平仮名になったという感覚がする。

紙を六折りにして、きちんと楷書で書いていたのに比べると、見たままに書き写せばよいので楽しい。

平仮名の集まりを一筆書きするかのように、単語として書いていくと、生き生きとゆらいでいるようで面白い。

いにしえからの ゆらぎを 楽しみたい

彼は絵画も習ってみたくなった。教室を探してみたが、道具もそろえたりすると出費がかさむ。

水墨画にしようかとも思ったが、ふと気付いた。

源氏物語の写本を絵に見立てて毛筆で模写してみてもどうだろう。

実際、書道のレッスンでバランス良く文字を書こうとすると、絵を描くような気持ちになる。

この調子で模写していけば、ゆらぎを描けそうな気がする。

彼はペン先が筆のような感触がするサインペンを買った。水性なので習字用紙だと滲みが気になる。コピー用紙だと書きやすい。

もう少し細かい字が書けると良いのだがと探したら、筆文字サインペンを見つけた。細字、極細の二種類とも買い、比べてみたところ、極細が書きやすい。

書道のレッスンで習っている和歌を書き写して、ゆらぎを楽しみたい。

サインペンで楽しんでいたら筆の感覚が鈍ってしまった。

息づかいが筆に伝わらない。というよりも根を詰めて呼吸を忘れそうになる。今年も歌会始めの提出期限の九月末が迫ってきた。できれば八月中に提出しておきたい。

ゆらぎを取り戻せるか否かが鍵のように思われる。

彼は筆を持つ手に力を入れ過ぎている。そのため筆の毛先が紙に触れる瞬間を的確に捉えられていない。

筆を持つ手の力を抜いてみると筆の重さが伝わってくる。

そのまま筆を紙面に向けていくと、紙面に当たる瞬間が把握できた。

この感覚を保ちながら、ゆらぎを書いていくのを彼は楽しみにしている。